

# I. 序 篇

## 第1章 はじめに

### 1.1. 論文の目的と対象

本論文の目的は、東アフリカ、タンザニアで話されているマテンゴ (Matengo)<sup>1</sup>語の総合的な記述をすることである。

マテンゴ語は、アフリカ大陸赤道以南で広く話されているバンツー諸語のひとつである。最近では言語学の理論的研究の中でもバンツー諸語が例として取り上げられることが増えてきている。しかしながら、そこで用いられてるデータのほとんどは、その研究者本人ではなく、他者によって収集されたものである。しかもその言語の全体像を知ることなく、対象となる現象のみをその言語から切り離して扱っているため、声調などの不可欠な現象を見落したままデータとして用いている場合が目立つ。このように、「未知の言語」に対しては、言語研究の基礎とも言える「言語事実」が軽んじられているのが現状である。

本論文では、フィールドワークで集めたデータを基にして、この言語の記述を行なう。これは単に「記述研究」という独立した研究であるのみならず、さらに言語学の諸理論に展開していく基盤となるべきものである。そのためには、できるだけ多くの現象や事例を示すことが有益であると思われる。本論文では、個別のテーマに限ることなく、また特定の理論の枠組みにとらわれることなく、「マテンゴ語」の全体像を明らかにしていくことを目指す。文法に関しては、バンツー諸語の性質上、動詞の構造に重点を置く。これまでのバンツー諸語の研究を見ても、動詞の理解は、文法の分析において重要な点のひとつだと思われる。

さて、1961年にタンザニアではスワヒリ語が「国家語」<sup>2</sup>として定められた。現在では

---

<sup>1</sup>これはタンザニア国内で用いられているスワヒリ語での表記である。「マテンゴ」という民族名は、マテンゴ語での発音をIPAで表記すると/matengo/となる。以下、地名や民族名の後ろに付した( )内の表記は、タンザニアで用いられている表記法による。

<sup>2</sup>スワヒリ語では“lugha ya taifa”「国家の言語」である。taifaは「国家」という政治的単位である「国」を表わす語で、領域や土地といった意味での「国」を表わす nchi という語とは区別される。taifa

スワヒリ語は文字どおり国中に普及しており、一部の年配者を除けば、ほとんどのタンザニア人がスワヒリ語と自分たちの民族語とのバイリンガル話者である。そのような状況の中で、タンザニアの諸民族語はスワヒリ語から多大な影響を受けている。言語本来の性質からだけでなく、「スワヒリ語の浸透」という外的要因によって、言語は急速に変化している。マテング語も例外ではなく、語彙、音韻、文法など、その影響はあらゆる面に見られる。その傾向は若者の間で特に顕著に現れ、年配者が話すマテング語と若者が話すマテング語には、語彙的にも音韻的にも文法的にも違いがある。

本論文は「今日使われている」マテング語を共時的に捉えるものであるが、上述のような事情から、一口に「マテング語」と言っても、何をマテング語と捉えるか難しいところである。「かつてはこのような区別があったが、現在では誰も区別しない」といった言葉がインフォーマントからもしばしば聞かれた。そこで本論文では、「インフォーマント自身がかつて使用していた可能な限り古い形のマテング語」を含む「インフォーマント自身が『マテング語』であると意識しているマテング語」を対象とした。従ってその中には、現在話されているマテング語の中にはあまり聞かれなくなった現象や、インフォーマント自身も今日では用いないという表現などもある。

本論文は、序篇、本篇、結び、からなる。序篇では、1章で本論文の目的と調査の背景について説明した後、2章で本論文の研究対象であるマテング語の概要と社会言語学的背景について検討する。本篇の「マテング語の文法」は4つの章からなる。主に、3章では音韻論、4章と5章は形態論、6章は統語論、について論じる。結びの7章では、これまで述べてきたことを振り返るとともに、残された問題や本論文で扱えなかった点など、今後の課題を示す。最後に資料として、マテング語の民話と語彙集を付す。

## 1.2. 調査の背景

本稿で用いるマテング語のデータは、すべて筆者自身がフィールドワークで収集したものである。フィールドワークは、1996年8月から1997年2月、1997年7月から12月、1999年1月から2月までの、合計約1年間行なった。調査地はタンザニア西南端のンビンガ (Mbinga) 県リテンボ (Litembo) 区<sup>3</sup>である。この地域は、歴史的にマテング人の拠点となった地域であると言われている (Ndunguru 1972:1)。

---

の表わす概念を明確にするために、本論文では「国家語」という訳語を用いる。

<sup>3</sup>タンザニアの行政区分は、上から、国 (スワヒリ語 Taifa), 州 (Mkoa), 県 (Wilaya), 郡 (Tarafa), 区 (Kata), 村 (Kijiji), となっている。

インフォーマントは、1932年リテンボ区リテンボ村生まれのマテング人男性、C. S. Ndunguru Kamchatika氏である。1953年から1988年までンピング県内で小学校教員をつとめ、現在は引退している。教員養成学校で学んだ1948年から1952年を除いては、マテング語話者のコミュニティ（以下マテング・コミュニティ）を離れて暮らしたことがない。配偶者もリテンボ村生まれのマテング人である。本論文で用いるマテング語の言語データは、基本的に全て Kamchatika 氏をインフォーマントに行なった調査による。従って、リテンボ地域のマテング語である。語彙に関しては、ンパパ (Mpapa) 地域のマテング語についても調査した。この調査のインフォーマントは、John B. M. Kasuku 氏である。彼は1937年ンパパ村に生まれ、就学と仕事のために1959～1971年にはマテング・コミュニティを離れているが、1972年以降リテンボ村に住んでいる。ただし、このインフォーマントからのデータは、音韻分析には用いていない。語彙集の中で、Kasuku 氏から得たデータが Kamchatika 氏のものとは異なる場合には、「ンパパ方言」と記す。インフォーマントは2人とも、マテング語、スワヒリ語、英語が話せる。

調査では、主にスワヒリ語を用いたが、スワヒリ語で質問することによってスワヒリ語の影響を導くと考えられる場合には、英語を用いた。調査の進め方は、主に以下の調査票を用いた語彙と文法に関する予備調査を行ない、そこから各項目や問題点について掘り下げていった。

#### 語彙調査票

- 「バントゥ諸語語彙調査票試案」 (湯川 1979)

#### 文法調査票

- “Lingua Descriptive studies: Questionnaire” (Comrie & Smith 1977)
- 「バントゥ諸語文法調査票試案」 (湯川 1977)

### 1.3. 先行研究

バントゥ諸語は、アフリカ諸言語の中でも体系的な研究がもっとも進んでいると言われている。タンザニアで話されているバントゥ諸語に関しても、文献の数全体を見れば近隣諸国と比べても決して少なくはない。しかしながら、研究がなされている言語や地域には偏りが見られ、わずかな文献しかない言語を含めても、その数はタンザニアのバントゥ諸語全体の半数にも達していない。マテング語に関する先行研究について述べる前に、タンザニアのバントゥ諸語に関する文献の傾向について述べる。

まず時代的な傾向であるが、研究が活発に行なわれたのはドイツ植民地時代と1970年以降である。ドイツ植民地時代の文献はキリスト教宣教師によるものが多く、この時代には

民族語によるキリスト教宣教が盛んだったことがうかがえる。出版されたもの以外にも、手書きやカーボン複写された語彙集や文法書が、ダルエスサラーム大学やキリスト教宣教団体の各本部などに残っている。しかしながら、かなりの数のこの種の貴重な資料が紛失してしまっていることは大変遺憾なことである。

1970年以降の研究は言語学者によるものが中心である。植民地時代に宣教師たちによって書かれたものの多くが、語彙や文法概要など、その言語全体についての文献であるのに対し、1970年以降のものは、特定の文法事項を取り上げて、それまで主にヨーロッパの諸言語に適用されていた言語学の諸理論を用いてそれらを分析するという研究が主流になってきている。そして外国人研究者によるものだけではなく、それらの言語を母語とする研究者たちによるものも増えてきてきた。ダルエスサラーム大学に提出された学位論文にも、自分の母語を対象言語として扱っている研究が数多く見られる。

次に、研究されている地域を見ると、南部に比べて、北部の言語に関するものが圧倒的に多い。これはいずれの時代にも共通している。チャガ(Chagga)語やハヤ(Haya)語、シャンバラ(Shambala)語など、たくさんの文献がある言語のほとんどが、北部で話されている言語である。ヤオ(Yao)語のような例外もないわけではないが、概して南部の言語は文献が少ない。それらの文献も、ひとりの言語学者あるいは宣教師が複数の言語を概略的に調査した報告がほとんどで、十分な記述はなされていない。マテンゴ語もそのような言語のひとつである。タンザニアにおけるスワヒリ語浸透の速度を考えると、記述研究が急がれるところである。

マテンゴ語に関する先行研究には、まず1909年にドイツの学術雑誌 *Mitteilungen des Seminars für Orientalische Sprachen* 12に掲載された語彙集 “*Kimatengo-Wörterbuch*”がある。これは、ドイツのベネディクティス修道会宣教師 Johannes Häfliger P.によって書かれたもので、約4000のドイツ語の見出し語に対して、マテンゴ語の対訳が付いている。語彙集と共に12の民話も紹介されている。Johannes Häfliger P.氏は、この前年1908年にも “*Fabeln der Matengo (Deutsch-Ostafrika)*” *Anthropos* 3で、マテンゴ語の民話を3つ紹介している。これらは100年近く前、つまり現在のようにスワヒリ語からの多大な影響を受ける前のマテンゴ語を知る貴重な資料であるが、5母音体系で表記していること、声調の記述がないこと、表記に統一性がないことなど、問題点も多い。

Turuka(1983)がロンドン大学に提出した博士論文、*The Identification of Adoptives in Matengo with Special Reference to Adoptives from Intra-Bantu Sources*では、スワヒリ語や周辺のバンツ語からマテンゴ語に借用された語について、通時的な音韻変化を中心に論じられている。この論文の中でTuruka氏は文法に関しては全く触れていないが、マテンゴ語の音韻体系、名詞の声調などについての説明をしている。しかしながら、デー

タや解釈などには同意しかねる点が多い。特に声調に関しては、名詞を声調によってグループ分けし、バンツー祖語や周辺の言語との比較を試みているが、基底声調と表層声調の区別をしておらず、混乱が見られる。

Deogratias S. Ngonyani が 1988 年にダルエスサラーム大学に提出した修士論文 *A Comparative Study of Kindendeule, Kingoni and Kimatengo* では、タンザニアのルブマ (Ruvuma) 州で話されているンデンデウレ (Ndendeule) 語、ンゴニ (Ngoni) 語、マテンゴ語の類似性を語彙統計学的に検証し、それぞれの言語の通時的な音韻変化について述べている。しかしながら、マテンゴ語の文法については、例文が数例あげられているだけで、検討はほとんどなされていない。

米田 (1995) では、マテンゴ語を社会言語学視点から捉え、スワヒリ語浸透の影響を多方面から受けているマテンゴ語の現状について論じている。この中で、マテンゴ語の文法と音韻に関して、ごく基本的な事柄について触れている。

Polomé(1980:9)によると、以上の研究の他に、カーボン複写で書かれたベネディクティス修道会宣教師 Elzear P. Ebner による *Grammatik der kiMatengo-Sprache* (1957) がある。しかしながら、これは 1994 年の段階では、これが保管されていたルブマ州にあるベネディクティス修道会の南タンザニア本部の書庫からすでに紛失しており、現在は入手不可能である<sup>4</sup>。

このように、マテンゴ語の音韻や文法についての体系的な研究は、これまでまったく発表されていない。マテンゴ語の民話や語彙など、紹介されているものについても、音韻的理解がなされていないために、いずれの場合も表記に問題がある。補完されるべき点は極めて大きい。

#### 1.4. 略号

本論文における例文には、次の略号を用いる。

S	主語辞
O	目的語辞
Ref	再帰辞

<sup>4</sup> *Grammatik der kiMatengo-Sprache* の内容は確認していないが、データの正確さには疑問がある。著者の Ebner はドイツベネディクティス修道会の宣教師であるが、彼の宣教地はンゴニ人の居住地である。上記の文献の他に、カーボン複写のンゴニ語の語彙集と文法書、また 1987 年に出版された *The History of the Wangoni* を著わしている。その中でマテンゴ語の単語がいくつか紹介されているが、そこにはンゴニ語と混同していると思われるものや、音韻体系の誤り、また表記の不統一、などが見られる。

R	関係辞
sg	単数形
pl	複数形
1	1人称
2	2人称
3	3人称
(数字)	名詞クラス番号
Np	名詞クラス接頭辞
過 T	過去時制辞
未 T	未来時制辞
移 T	移動未来時制辞
否 T	否定接続時制辞
同 T	同時時制辞
仮 T	仮想時制辞
基 F	基本語尾
完 F	完了語尾
非完 F	非完了語尾
接 F	接続語尾
否 F	否定接続語尾
希 F	希求語尾
PreF	前語尾辞
Rad	動詞語根
Exp	拡大辞
Ext	拡張辞 (拡大辞+派生辞)
Suf	派生辞
AP	適用形派生辞
RE	相互形派生辞
be	be 動詞
Aux	動詞補助詞
Neg	否定語
属	属辞
等位	等位接続語
随伴	随伴を表わす前置詞